Osaka University Knowledge Archive

Title	慢性腎不全症患者および腎移植後の患者における胃液分泌能
Author(s)	浜辺, 順
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33662
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【78】

氏名・（本籍）	浜辺　順（はまべ　すなお）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第　6280　号
学位授与の日付	昭和59年1月9日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**慢性腎不全症患者および腎移植後の患者における胃液分泌能**
論文審査委員	（主査） 教授　垂井清一郎 （副査） 教授　阿部　裕　教授　園田　孝夫

論文内容の要旨

（目　的）

慢性腎不全症における胃液分泌能に関しては，低酸，過酸，正酸説があり，諸家の間で未だ一定の結論が得られていない。また，慢性腎不全症患者の血清ガストリン値は高値を示すことが多いと報告されているが，高度の腎機能障害にもかかわらず，その血清ガストリン値が正常範囲にとどまるものも認められる。本研究は，慢性腎不全症患者における胃分泌能を明らかにするとともに，その胃液分泌能に及ぼす血液透析および腎移植による治療の影響について検討したものである。

（対象と方法）

1. 対　象

慢性腎不全症患者12例，腎移植後の患者8例および健常者13例を対象とした。

2. 胃液分泌能の検討

全症例にテトラガストリン4 μg／kg 筋注刺激による通常の胃液検査を行った。検査直前にガストリン測定用採血を行った。

3. 血液透析中における胃液分泌能

任意に選択した慢性腎不全症患者6例に対し，30分間胃液を採取した後，血液透析を開始し，ひき続き1時間胃液採取後テトラガストリン4 μg／kg 筋注刺激による胃液検査を行った。

4. calcium 持続静注時の胃液分泌能

血液透析により酸分泌能の回復をみた慢性腎不全症患者に胃管を挿入し，30分間胃液を採取した。その後，calcium 7.5 mg／kg／2hの点滴静注と共に1時間胃液を採取した後，テトラガストリン4 μg

／kg 筋注刺激し，さらに1時間胃液採取を行った。

5. 内視鏡観察下胃粘膜生検

血液透析により酸分泌能の回復をみなかった慢性腎不全症患者3例のうち2例に，内視鏡観察下胃粘膜十二点生検を施行し萎縮の程度を組織学的に観察した。

6. 胃液中酸，ペプシンの測定

いずれも日本消化器病学会胃液測定法検討委員会の方法に従って測定した。

7. 血中ガストリンの測定

ＣＩＳ−kit を用いた一抗体法による radioimmunoassay にて行った。

（成　　績）

1. 胃液分泌能に関する検討

慢性腎不全症患者の基礎酸分泌量（BAO），刺激後酸分泌量（MAO）はそれぞれ0.88±0.40mEq／h，4.68±1.44 mEq／h であり，また基礎ペプシン分泌量（BPO）は18.6±5.7 mg／h，刺激後ペプシン分泌量（MPO）は 60.5 ± 13.8mg／h であった。一方腎移植後の患者のBAO，MAOはそれぞれ，3.63±0.68 mEq／h，10.09± 1.78 mEq／h で，これらはいずれも慢性腎不全症患者より有意に高値で，正常対照群に比し同程度であった。

2. 血液透析の胃液分泌に及ぼす影響

血液透析開始後，慢性腎不全症患者6例中3例で酸分泌能の亢進が認められたが，他の3例では全く酸分泌が認められなかった。また，血液透析で酸分泌の亢進のみられた3例では血清ガストリン値は正常域にあり，酸分泌のみられなかった症例では高ガストリン血症を示していた。

3. calcium 持続静注の胃液分泌に及ぼす影響

calcium の点滴静注によって，血清calcium値の増加は透析の場合に比しやや大きかったが，胃酸分泌量の増加はいずれも透析中のそれよりも低値であった。

4. 血清ガストリン値に関する検討

慢性腎不全症患者の平均血清ガストリン値194± 56 pg／ml で，健常者の平均血清ガストリン値２２±４ｐｇ／ml よりも有意に高価であったが，腎移植後の患者の平均血清ガストリン値３９±１６ｐｇ／ml は健常者のそれと同程度であった。

5. 無酸症例の胃粘膜組織像

慢性腎不全症患者のうち，血液透析により酸分泌能の回復を見なかった2例の胃底腺領域の生検組織像は，腺窩部に比べ胃腺部が著明に萎縮するものの，壁細胞，主細胞共に認められ，いずれも腺境界は胃角部にあり，その上昇は認められなかった。また胃体上部前壁の粘膜の厚さは健常者の１／２以下，胃底腺の長さは1／3 以下であった。

（総　　括）

1. 慢性腎不全症患者群に比し，腎移植後群で胃液分泌能が有意に高値であった。
2. 慢性腎不全症患者6例中3例に血液透析により酸分泌の改善（亢進）をみた。
3. 血液透析により酸分泌能の回復をみるのは calcium の作用のみによるものではなく，透析そのもの

の効果が大きいと思われる。

4. 慢性腎不全症患者のうち血液透析により酸分泌能の回復をみなかった無酸症例の胃粘膜組織所見は通常の萎縮性胃炎の組織像とは趣を異にしており腺境界の上昇は認められなかった。

5. 以上より，慢性腎不全症患者の胃液分泌障害は可逆的な変化によるものと考えられ，患者血中にある種の胃液分泌抑制因子の存在が想定される。

論文の審査結果の要旨

慢性腎不全症における胃液分泌能に関しては，諸家の間で未だ一定の結論が得られていない。本論文は，慢性腎不全症患者における胃分泌能を分析するとともに，その胃液分泌能に及ぼす血液透析および腎移植による治療の影響について検討したものである。

その結果，慢性腎不全症患者群において，胃酸・ペプシン分泌能は低下し，腎移植により多くは正常化することが判明した。また，血液透析中に酸分泌能を検討し得た慢性腎不全症患者の半数に酸分泌の亢進をみた。以上より，慢性腎不全症患者の胃液分泌障害の多くは可逆的な変化によるものと考えられ，患者血中に血液透析により除去し得るある種の胃液分泌抑制因子の存在することが示唆される。

本論文は，慢性腎不全症に随伴する消化管病態生理の解明にとって重要な知見を提供した有意義な研究と考えられ，学位に値すると判断される。